

シノドスへの歩み みことばと共に

待降節第四主日C年

小西広志

2021年12月19日

はじめに

東京教区の皆さん、こんにちは。教区シノドス担当者の小西広志神父です。今日は2021年12月19日、待降節第四主日です。今日の朗読の箇所をシノドスの教会のあり方と関連づけながら読んで、味わっていきましょう。

ベツレヘム

今日の第一朗読の冒頭「エフラタのベツレヘムよ」（ミカ5章1節）に注目してください。ベツレヘムは、ヘブライ語でベト・レヘムでしたでしょうか。確か「パンの家」という意味があったと思います。この町でダビデ王が生まれました。ここはエフライム（エフラタ）族という小氏族が住む土地でもありました。少数派の中から「イスラエルを治める者が出る」（1節）と第一朗読は伝えます。彼は3節にあるように「主の御名の威厳をもって」群れを養い、そして群れは「安らかに住まう」（3節）のです。この「イスラエルを治める者」の「出生は古く、永遠の昔にさかのぼ」（1節）るのです。神さまは永遠の昔から救いのご意思、計画の中でエフライム（エフラタ）から救い主が生まれることを決めていました。この救い主は、力の均衡でもなく、人間の力によるのでもない、神の力に身を委ねて主の力、神である主の御名が働くことで生まれる「平和」をもたらすのです。ですから、第一朗読の最後では「彼こそ、まさしく平和」（4a）であると力強く語られています。

来ました

第二朗読の後半にある言葉、「御覧ください。わたしは来ました。御心を行うために」（ヘブ10章9節）に注目しましょう。「世に来られた」（朗読導入句）キリストは、「焼き尽くす献げ物や罪を贖うためのいけにえを好まれ」（8節参照）ませんでした。キリストが来られたのは神の「御心を行うため」（9節）だったのです。神の御心とは「律法に従って献げられるものを望みもせず、好ま」（8節）ないということです。そこで、御心を立てるために、キリストは自分自身を献げたのです。こうして、第二朗読の最後にあるように「わたしたちは聖なる者とされた」（10節）のです。

第一朗読と第二朗読から気づかされるのは、あのベツレヘムの馬小屋でスヤスヤ眠る幼子こそが「平和」そのものであり、幼子によってわたしたちは「聖なる者」とされるという事実です。

マリアは出かけて、急いで山里に向かい

福音朗読では冒頭の言葉に注目しましょう。「そのころ、マリアは出かけて、急いで山里に向かい、ユダの町に行った」(39節)。当時は祭司たちの多くはユダの田舎町(ネヘ11章3節参照)に住んでいたそうです。特に山地に住んでいたと考えられています。そこで、ここでの「ユダの町」をヘブロン南方9キロメートルの祭司の町「ユッタ」と見なす人もいますし、エルサレムの西方3キロメートルの「アイン・カリム」と考える人もいます。まあ、どちらでもかまいません。

なぜ、身重のマリアさまは急いで出かけていったのでしょうか。ロザリオの祈りではカトリック教会は聖母のエリザベト訪問で愛の徳を乞い願うと祈ります。それは、歳を取って子どもを宿した親戚のエリザベトのお産の手伝いをするために、同じく身重のマリアが急いで出かけたからと考えられてきました。マリアはエリザベトのもとに三ヶ月滞在しています(56節参照)。その間にマリアはお手伝いをしたのだらうと想像したわけです。まあ、これはこれで面白い想像ですけど、少し無理があります。

前の前の教皇さま、聖ヨハネ・パウロ二世教皇はマリアさまについて記した回勅「救い主の母」のなかでエリザベトのもとへと急いで旅した理由を「マリアは、愛に駆られて親戚の家に行きます」と記しています(RM12)。「愛に駆られて」という表現が印象的です。天使ガブリエルからのお告げを受けて、マリアさまは自分が神さまから深く愛されていることに気がついたのでしょうか。そして、同じように愛されている人がエリザベトがいる。マリアさまは、ご自分が愛されていることを確かめるために、あるいはご自分が愛されていることを強く感じるために、エリザベトのもとへと急ぐのです。山道を歩くマリアの姿は、若さと喜びに満ちた生き生きとしたものだったと想像します。そして、今日の福音にあるように愛された者同士の出会いと交わりが生まれていったのです。

まとめ

ところで、今から25年も前のことですが、日本の教会ではちょっとした論争が繰り広げられました。それは宣教に関する論争でした。ある人々は宣教とは福音の種を蒔くことだ主張しました。いわば宣教種蒔き論です。しかし、ある人々は、いやいやもうすでに日本の社会の中では福音の価値観で生きている人々がいるのだから、そういった方々と出会って、喜びを共にすることこそが宣教だと語りました。つまり、宣教刈り入れ論です。論争は何となくやむやの中に終わった感じがしましたが、わたしには、どちらの立場にも正しいように思います。

今日の福音朗読を目にすると、わたしは、あの頃の熱い宣教論争を思い出します。確かに現代の社会は神さまの存在が薄い社会です。おカネとモノが大切な社会です。イエスさまが説かれた神の国の福音はどっかに消え去ってしまったかのようです。しかし、人々の毎日の生活に触れてみると、イエスさまのメッセージに従って生きている方々に出会います。特に貧しく、苦しみながら生きている人々の中にはわたしたち以上に福音の価値観で生きようとしている人々がいることに気づかされます。

福音を知らない人に福音を告げ知らせるのも教会のあり方ですが、社会の中で小さくされながらも、しかもイエスさまのことを知らないにもかかわらず、イエスさまのような生き方をしている人々と出会っていくのも教会のあり方なのではないでしょうか。「あなたも、この困難な生活の中で神さまの愛を生きているんですね」と呼びかけ、「実は、わたしどももあなたが生きているように愛に生きてみたいと願っているんですよ」と正直に語りかけるような姿勢が教会には必要だと思います。そして、「神さまから愛された者同士、一緒に生き

ていきましょう」と「共に生きる」ことが求められているのではないのでしょうか。

こうして、わたしたち人間は「聖なる者とされ」（第二朗読）、「地の果てに及ぶまで平和」（第一朗読参照）が実現していくのです。ベツレヘムでスヤスヤと眠る幼子が苦しむ人、悲しむ人、貧しい人の友でありますように。

よいクリスマスをお迎えください。

それでは、また来週。